

# 角度を変えて地図を眺める

インサイダー編集長

高野 孟

ふだん見慣れた地図でも、角度を変えて眺めると、まったく新しい視点やイメージを得られることが多い。

## 西が上の世界地図

私事で恐縮だが、拙著『最新・世界地図の読み方』(講談社現代新書、99年刊——もう“最新”ではなくなってしまって、改訂版を出さなければならないのだが)の28ページには、ユーラシア大陸を90度回転させて西を上にした地図が載せてある。こうしてみると、日本列島はユーラシア大陸のいちばん下に「パチンコの受け皿」のように控えていて、遠くはローマやペルシャからインドを経て、中国、朝鮮と伝わるシルクロードだけではなく、中央アジアからモンゴル、中国東北に通じる遊牧民の草原のシルクロード、もっと北のロシアやシベリアのツングース文化圏からアイヌ民族の生活圏に繋がった北方ルート、インド洋から大陸の南辺を伝ってマラッカ海峡、台湾、琉球へと焼酎や鰐節をもたらした海のシルクロード、さらに南のオセアニア、太平洋の島々から黒潮に乗ってやってくる椰子の実の道……等々、東半球の何千年に及ぶ様々な人々の営みの果実が、まるで日本列島にすくい取ってもらえずにその下の太平洋の底に沈んでしまうのを恐れるかのように、後から後から流れ込んできたという「日本文化」のイメージが浮かび上がる。

この図をおもしろいと言ってくれた人はたくさんいて、たとえばアート・ディレクターの浅葉克

己氏は、丸の内をテーマにしたある対談でこの図を掲げて「日本の文化のあり方の図表っていうのを友人の高野孟さんがつくったんだけど、世界地図を縦にしてみると、日本はパチンコの受け皿なんですよ。打つと各国からいろいろな物が落ちてくる。受け皿としての日本、その真ん中が丸の内なんですよ。ここから何かが生まれないはずがない」と語っている。

上記拙著の中では、また、オーストラリアのグレゴリーズ出版社が出している「逆さまの世界地図(Down Under Map of the World)」にも触れている。それを見ると、ユーラシア大陸と北米大陸のいわゆる先進国世界は下のほうに重く沈んでいて、そこから上に向かって炎が燃え上がるよう アフリカ大陸、南米大陸、そしてインドア大陸が突き上げているし、風に吹かれてちぎれた雲のようにマレー半島、インドネシア、パプアニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドが斜めに流れている。たったそれだけのことで、北を上にした世界地図が当たり前と思い込んでいる我々には新鮮で、もしかしたら「沈滞する先進国世界、燃え上がる第3世界」というほうが世界の現実に近いのかもしれないという想念が湧いてくる。

## 南東が上の日本地図

同じことを日本周辺に適用したのは、富山県が作成した「逆さまの日本地図」で、日本海を囲む日本列島、ロシア極東、朝鮮半島、中国沿海部の範囲を富山市を中心とした正距方位図法で、南東を上に、ちょうどモンゴル共和国の遙か上空から日本、太平洋方面を見渡している感じで描いたもので、もちろん文字も逆に印刷されている。

これは日本中世史の大家・故網野善彦氏が講談社「日本の歴史」シリーズ第0巻『「日本」とは何か』(01年刊)の巻頭に掲載してすっかり有名になったものである。この原図は、同県が国土地理院の承認を得て作成したもので、同県の外郭組織「日本海学推進機構」のホームページ(<http://www.nihonkaigaku.org/>)で見ることができる。

これについて県庁の国際・日本海政策課のホームページ (<http://www.pref.toyama.jp/sections/1716/1716.htm>) の中の「日本海学の概要」には次のように解説がある。

「(略) 富山県では『環日本海諸国図』(通称『逆さ地図』)を作成しています。この逆さ地図を見ると、日本海が大きな湖のように見えます。対馬海峡、宗谷海峡、間宮海峡という浅くて狭い海峡以外は陸に囲まれた、湖のような日本海を囲んで、大陸、朝鮮半島、そして日本列島が一体的なものに見え、日本が大陸から切り離された島国だという見方ではなく、海を挟んだ環日本海、北東アジアと一体的な地域であることが、視覚的にイメージできます。

島国日本という発想に陥りがちな従来の見方を変え、日本は、地球という球体においてどのような位置づけにあるのか、また、その中でどのような役割を果たしていかなければならないのか、柔軟な発想で考えていかなければなりません」

その通りで、普通の地図では日本海や東シナ海は日本と大陸を隔てる障壁のように感じられるが、逆にすると狭い湖にも似た内海で、むしろ多角的な交流の空間であることが分かる。

網野氏は上記著書の中で述べている。「この地図を見ると、北海道、本州、四国、九州等の島々を領土とする『日本国』が、海を国境として他の地域から隔てられた『孤立した島国』であるという日本人に広く浸透した日本像が、まったくの思いこみでしかない虚像であることが、だれの目にもあきらかになる。そしてこの虚像をあたかも真実であるかのごとく日本人に刷り込んだのは、とくに明治以降の近代国家であり、さきの島々を領土として国民国家をつくり出すという課題を自らの課題とした政府主流の選んだ1つの選択肢であった」と。その虚像を一気に突き崩すほどの力をこの逆さまの日本地図に見いだしたからこそ、彼はそれを「日本とは何か」を問う書の巻頭に掲げたのに違いない。

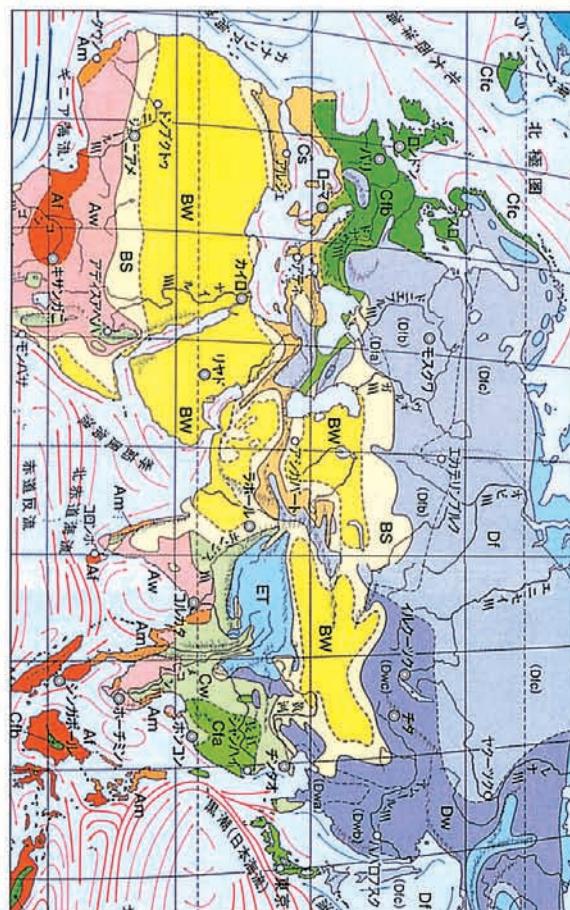
網野氏はまた、さらに視野を広げて、「アジア大陸の東辺には、北から南に、5つの巨大な内海

が連なっている」とも言って、「日本をとりまく『5つの内海』世界」という地図も掲げている。ベーリング海、オホーツク海、日本海、東シナ海、南シナ海で、それらがそれぞれに独自な世界を形成していることを知らなければ、日本列島社会の成り立ちなど理解できるはずもないと言うのである。

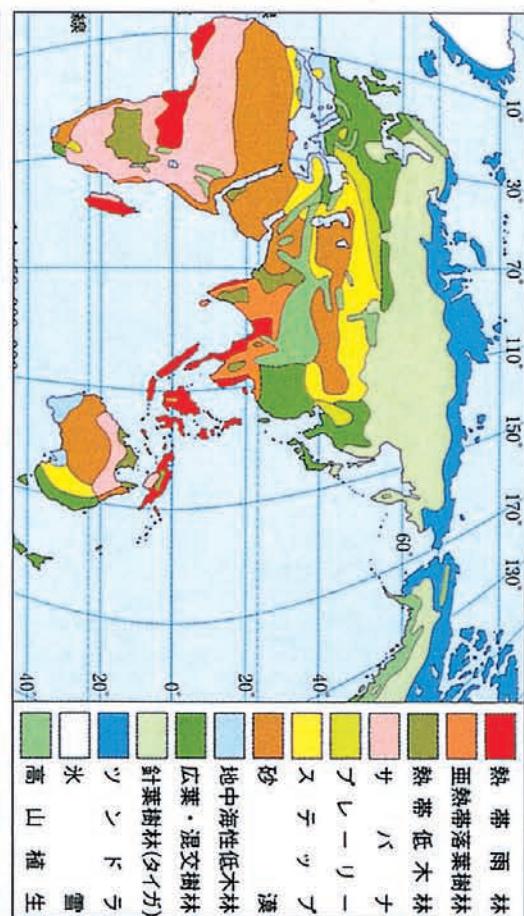
## 日本文化の多様性

上述の「パチンコの受け皿」論は、日本文化の多様性・多重性をいさかマンガチックにイメージしたものだが、これをもう少し実体的に捉えるには、日本列島が面する東アジアの気候区分や海流、それらに大いに影響された植生分布などの地図を重ねて見ることだろう。網野氏の言う5つの内海には、北から順に、ツンドラ気候、亜寒帯湿润気候、亜寒帯冬季少雨気候、ステップ気候、砂漠気候、温暖冬季少雨気候、温暖湿润気候、熱帯雨林気候など世界の気候区のほとんどがひしめき合うように並んでいて、ショーケースをなしている。海流は、寒流である親潮と暖流である黒潮とそのそれぞれの支流がまさに日本列島の両側でぶつかりあっていて、そのようなぶつかりのまったく中に存在する国はほかに例がないと言って言いすぎではあるまい。

植生から見ると、その気候区にはほぼ照応して、ツンドラ帶、針葉樹林（タイガ）帶、広葉・混交樹林帶、ブレーリー帶、ステップ帶、亜熱帯落葉樹林帶、熱帯雨林帶が間近にあり、日本自身はおもに広葉・混交樹林帶に属するが、佐々木高明氏のより厳密な分類（『日本文化の多重構造』、小学館、97年刊）では、カシ、シイ、タブ、クス、ツバキなど常緑広葉樹の「照葉樹林帶」、ナラ、カバ、シナノキ、ニレ、カエデなど落葉広葉樹の「ナラ林帶」、北海道東部の「亜寒帯針葉樹林帶」、それに黒潮に面する地域の「亜熱帯モンスーン林帶」が折り重なっている。照葉樹林帶は、西日本から中国の長江以南、雲南高地、東南アジア北部山岳部、ヒマラヤ中腹に繋がる。ナラ林帶は、朝鮮南部から瀋陽近辺、黃河流域ではリョウトウナラを



帝国書院『新詳高等地図 最新版』 気候区と海流（左）・植生分布（右）



中心とした暖温带落葉広葉樹、中国東北からロシアのアムール川流域ではモンゴリナラを中心とした温帶落葉広葉樹で朝鮮中部・北部、日本の長野県から東北地方、北海道西部もそれに入る。北海道東部は亜寒帶常緑針葉樹林帶で、サハリン、ロシア極東、シベリア西部に繋がるが、実際には針広混合してナラ林帶と似た景観を持つ場合が多いと言う。

稻作の起源は長江流域説と雲南説があってまだ確定できないが、いずれにせよ照葉樹林帶の文化である。餅、大豆発酵食品、麹による酒作り、飲茶など我々に馴染みの深い食文化の多くが雲南起源と言われていることからすると、稻もまたそうであってもおかしくない。他方、アワ、キビなど雑穀は、今のアフガニスタンを中心とした辺りが発祥の地で、それが北回りの草原ルート経由とともに南の黄河流域経由と2つのルートで日本に伝わったという説が有力だが、これまたいずれにせよナラ林帶の文化である。さらに黒潮ルートから

は漁労文化だけでなく焼き畑やイモの文化が来たし、北方からは沿岸定着型のサケ漁やアザラシなど海獣狩猟の文化も来てそれが縄文文化の基礎をなしたとされている。

こうしてみると、日本自体が驚くほど多様な自然条件とそれに伴う文化を抱えたショーケースのような状態であることが改めて感じられる。しかも、それらが単に雜居しているのではなく、私は「キムチを漬けるときのように」と表現しているが、次から次へと重なり合いながら渾然一体となって熟成して、独特の日本文化を形作ってきた。よく「日本人は物真似がうまい」と言うけれども、それはむしろ日本人の度量の広さの表れであり、やって来るすべてを受け入れつつそれを消化し、発酵させ、熟成させて独自の味をつくり出していく能力の高さの証明ではないのだろうか。

地図を横にしたり逆さまにしたりすることをきっかけにして、我々のあまりに固定化した日本像をもみほぐしていくことが課題である。